

四方から五行へ

著者	高戸 聡
雑誌名	東北大学中国語学文学論集
巻	9
ページ	1-24
発行年	2004-11-30
URL	http://hdl.handle.net/10097/48985

四方から五行へ

高戸 聡

はじめに

五行とは、赤塚氏によれば「水・火・金・木・土という名で表される、すべての物体・現象を生成させ衰滅させる要因である。すべての物は五行の一またはその複合によって成っており、それぞれ五行による共通性のあるものとして分類される。」とされる（1）。五行説は、本来無関係なはずの事象を関連づけて考える分類体系であると考えられる。それは方位や季節や音階や色などといった本来無関係な区分の系列を、五つの要素に関係づけ分類することで成立している。とりわけ各々の方位と四季との関連は、五行思想においては中心的な位置を占めている（2）。

この方位と四季との結びつきは、五行説が形成される前段階あるいは萌芽期にあたりと考えられる。それでは、この結びつきは何時どのような仕方によって生じたのだろうか。本稿は、その契機的一端が『毛詩』に見られることを明らかにしようとするものである。

一 殷代四方風

そもそも五行説の起源については、胡厚宣氏（3）以来、殷代の四方風がその起源の一つと考えられている。胡厚宣氏は、四方とともに、卜辞に中商の語が見えることから、五方の觀念があったとし、これが五行説の雛形になったとする（4）。以下が胡厚宣氏が見出した、殷代の四方風を示す甲骨文である。引用文中の括弧は推測される文字を示す。

東方曰析、風曰𩇑。	東方を析と曰い、風を𩇑と曰う。
南方曰夾、風曰𩇑。	南方を夾と曰い、風を𩇑と曰う。

西方曰𩇑、風曰𩇑。 西方を𩇑と曰い、風を𩇑と曰う。

□□□（北方曰）□、風曰𩇑。 （北方は□と曰い、）風は𩇑と曰う（5）。

このト辞では、四つの方位とそこから吹く風が記されている。ただし四方位の「析」・「夾」・「𩇑」などが四方から吹く風を司っていた神と考えられていたかどうかは分明ではない。この殷代ト辞に見られる四方風について胡厚宣氏は、ほぼ同じものが『山海經』・『尚書』「堯典」にも見えていることを指摘している（6）。

胡厚宣氏の示唆を受けて赤塚忠氏は、『山海經』や『尚書』堯典篇の記述は、殷代の四方風信仰から千年近くも時を経たのちのものであるが、それらは四方風からの継承を示し、これが方位や季節の循環と密着して展開し、かつ五行説中のものとなっていることさえ示している。」（7）とし、五行説の起源を殷代に求めている。

赤塚氏は四方風が「方位や季節の循環」と結びついて「五行説中のもの」となったとするが、金谷治氏は「時令のそもそもの起源というものを溯って考えてみると、はっきりしないことではあるが、恐らくそこでは五行とは必ずしも結びついてはいなかったであろう。四季の推移と五行の運行との間には、数のうでで合致しにくい不整合があるからである。」（8）とし、「時令思想の源頭に四方風を置くということなら通ずるであろうが、五行説の起源に四方風をおくのは疑問が多いのではなかろうか。」とする（9）。

殷代四方風が直接に五行説の起源となったか否かについては、諸家の間では見解が分かれるが、『山海經』に見える神名と『尚書』「堯典」の記述が殷代ト辞の四方風の伝承を残しているものであるという見解は、楊樹達氏（10）・陳夢家氏（11）・赤塚忠氏・池田末利氏（12）等多くの研究者の間で一致している。

では、四方と「時令」すなわち四時との関係はどうであろうか。楊樹達氏は、甲骨文に四時の名が見えないことから、四方と四時が互いに配当されるのは、『尚書』堯典に至ってからであるとする。その上で、『禮記』「月令」・『呂氏春秋』「十二紀」・『淮南子』「時則訓」に至ってから、四方に中央を増して五方となったとする。その後五行五音などと共に、五方は四時に配当されたとする（13）。

さらに、この楊樹達氏の指摘を受けて池田末利氏は「楊氏などがいう如く、ト辞には四時の概念がまだなかったとはいえ、四方が四時に配當された形跡の存することは、方位觀念と季節觀念——更に拡大すれば、古代社会における空間性と時間性との融即を示唆するものであることを見通してならぬ。」（14）とする。

四方風と四時を結びつける赤塚氏の所説について、金谷氏は「赤塚氏は東方の析と𩇑、南方の𩇑と長、西方の束と𩇑などという風名を、農耕を主とする季節の特色によって名づけた

ものとしてそれぞれの字義を考證しているが、もちろん異説の多い不確定なことで、それを根拠にできる性質のものではなかろう。」(15)とし、さらに「甲骨文では四季の名がそろっていないということも、考慮しておく必要がある。」(16)とする。つまり池田氏所説のように「四方が四時に配当された形跡」が存したとしても、殷代四方風では、四方と四時の結びつきは、確定的な事実としては考えられないとする。筆者もこの金谷氏の説に賛同する。

また本章の冒頭に記した胡厚宣氏の所説のように五方の觀念が存在したとしても、五方では四季と結びつき難い。それは金谷治氏が指摘されるように、四と五という数字の上での不一致があるからである。さらに胡厚宣氏と赤塚氏はともに四方風を根拠として、四方と四時を結びつけている。しかし中央と四方風との結びつきは見いだされていない。つまり、五方の觀念と四方風とは結びつかないと思われる。

以上のことから、四方位に中央を加えた五方の觀念と、四方風と四季との結びつきの觀念は、全く無関係ではないにしても、直接結びつくものではなかったと考えられる。それでは五方觀念と、四方と四季の結合した觀念は、どの時点で五行説に展開していったのだろうか。

二 『山海經』・『尚書』「堯典」に見える殷代四方風の伝承

さて胡厚宣氏が指摘した『山海經』に見える殷代卜辞に類似する記述とは、「大荒東經」・「大荒南經」・「大荒西經」の以下の部分である。

大荒之中有山、名曰鞠陵于天・東極・離瞀、日月所出。名曰折丹。東方曰折、來風曰俊。處東極、以出入風。(「大荒東經」)

大荒の中 山有り、名を鞠陵于天・東極・離瞀と曰い、日月の出づる所なり。名を折丹と曰う。東方を折と曰い、來る風を俊と曰う。東極に處りて、以て風を出入せしむ。

有女和月母之國。有人名曰梟、北方曰梟、來之風曰狻。是處東極隅(17)以止日月、使無相間出沒、司其短長。(「大荒東經」)

女和月母の國有り。人有り名を梟と曰い、北方を梟と曰い、來るの風を狻と曰う。是れ東極の隅に處りて以て日月を止め、相い^{まじ}間わりて出沒すること無からしめ、其の短長を司る。

有神名曰因因乎。南方曰因乎、夸風(18)曰乎民。處南極以出入風。(「大荒南經」)

神有り名を因因乎と曰う。南方を因乎と曰い、夸風を乎民と曰う。南極に處りて以て風を

出入せしむ。

有人名曰石夷。來風曰韋。處西北隅、以司日月之長短。（「大荒西經」）

人有り名を石夷と曰う。來る風を韋と曰う。西北の隅に處り、以て日月の長短を司る。

殷代卜辞と完全に同じものではないが、『山海經』の記述が卜辞の伝承を残したものであることは、前述の通り諸家の間で一致している。

一見して殷代卜辞の「某方を某と曰い、風を某と曰う」という書式が踏襲されていることが分かる。また殷代卜辞においては明確ではなかった神格が、「大荒經」では「人あり名を梟と曰い」や「神有り名を因因乎と曰う。」や「人有り名を石夷と曰う。」のように、東方の「折丹」以外は、神人として明記されている。さらに、「東極に處りて、以て風を出入せしむ。」や「東極の隅に處りて以て日月を止め、相い^{まじ}間わりて出沒すること無からしめ、其の短長を司る。」や「西北の隅に處り、以て日月の長短を司る。」のように、各々の方位に居る神人が司る風や日月の出入などが記されている。「日月を止め」や「日月の長短を司る。」とあり、殷代卜辞に明記されていなかった各方位の神人の職掌が付加されていることから、神人がより重視されていたことが分かる。

しかし上記の『山海經』『大荒經』の四方風神は、日月の長短や出入を司ってはいても、季節との結びつきはなく、五行説に見られるような木火土金水の要素とも関わりがない。

一方『山海經』と同じく殷代卜辞の伝承を残しているとされる『尚書』『堯典』には、「析」・「夾」・「𡗗」のような殷代四方風神の名が、『山海經』のような神人の名としてではなく、民の営みを表す語として記述されている。以下にそれを掲げるが、引用文中の（*）は偽孔伝（19）の付された位置を示し、伝文は後掲する。

乃命羲和、欽若昊天、厯象日月星辰、敬授人時。

分命羲仲、宅嵎夷、曰暘谷。寅賓出日、平秩東作。日中星鳥、以殷仲春。厥民析、鳥獸孳尾（*1）。

申命羲叔、宅南交、平秩南訛。敬致。日永星火、以正仲夏。厥民因、鳥獸希革（*2）。

分命和仲、宅西、曰昧谷。寅饒納日、平秩西成。宵中星虛、以殷仲秋。厥民夷、鳥獸毛毨（*3）。

申命和叔、宅朔方、曰幽都。平在朔易。日短星昴、以正仲冬。厥民隩、鳥獸氄毛（*4）。
帝曰、咨汝羲暨和、葺三百有六旬有六日。以閏月定四時成歲。允釐百工、庶績咸熙。（「堯典」）

乃ち羲和に命じて、欽しみて昊天に若い、日月星辰を麻象し、敬いて人に時を授けしむ。
分かちて羲仲に命じて、嵎夷に宅らしめ、暘谷と曰う。寅みて出ずる日を^{みちび}寅^き、東作を平
秩せしむ。日は中しく星は鳥、以て仲春を^{ただ}殷す。厥の民は^{せき}析、鳥獸は孳尾す。

申ねて羲叔に命じて、南交に宅り、南訛を平秩せしむ。敬んで致す。日は永く星は火、以
て仲夏を正す。厥の民は^{いん}因、鳥獸は希革す。

分かちて和仲に命じて、西に宅らしめ、昧谷と曰う。寅んで納る日を^い餞^り、西成を平秩せ
しむ。宵は中しく星は虚、以て仲秋を殷す。厥の民は夷、鳥獸は毛^{ととの}毳^う。

申ねて和叔に命じて、朔方に宅らしめ、幽都と曰う。朔易を平在せしむ。日は短く星は昴、
以て仲冬を正す。厥の民は^{いく}隩、鳥獸は毼毛す。

帝曰く、「咨汝羲と和と、^あ葦^きは三百有六旬有六日。閏^{じゅんげつ}月を以て四時を定め歳を成す。允に
百工を^{おさ}釐^{ひろ}め、庶績咸熙し」と。

前掲『山海經』「大荒東經」では「名を折丹と曰う。東方を折と曰う。」と記していたが、『尚
書』「堯典」では「厥の民は析」と記述している(20)。同様に、『山海經』「大荒南經」の「神
有り名を因因乎と曰う。南方を因乎と曰い」は『尚書』では「厥の民は因」、『山海經』「大荒
西經」の「人有り名を石夷と曰う。來る風を韋と曰う。」は『尚書』では「厥の民は夷」、ま
た『山海經』「大荒東經」で「人あり名を曷と曰い、北方を曷と曰い」と記していた部分につ
いては、『尚書』では「厥の民は隩」と記述している部分が対応すると考えられている(21)。
經文の「析」・「因」・「夷」・「隩」という語について、偽孔伝は以下のように説明している。

* 1 「析」:「…春事既起、丁壯就功。…言其民老壯分析。…」

…春の事既に起こり、丁壯は功に就く。…中略…其の民の老と壯と分析するを
言う。…

* 2 「因」:「因謂老弱因就在田之丁壯、以助農也。…」

因とは老弱の田に在る丁壯に因り就きて、以て農を助くるを謂うなり。…

* 3 「夷」:「夷平也。老壯在田、與夏平也。…」

夷は平なり。老壯 田に在ること、夏と^{ひと}平しきなり。…

* 4 「隩」:「隩室也。民改歳入此室處、以辟風寒。…」

隩は室なり。民 改歳には此の室に入りて處り、以て風の寒きを辟く。…

偽孔伝では、「析」については「丁壯は功に就く。…其の民の老と壯と分析するを言う。」、
「因」については「因とは老弱の田に在る丁壯に因り就きて、以て農を助くるを謂うなり。」、

「夷」については「老壯 田に在ること、夏と^{ひと}平しきなり。」とあり、老人と若者が分かれて若者が農耕に行くことや、老人と少年が若者と一緒に農耕をすることと説明している。つまり、『山海經』の四方風神の名がそれぞれ「析れ」・「因る」・「夷しく」・「隩し」などと人々の生活を描写する語として使われているのである。

「堯典」にはさらに「義仲に命じて、嵎夷に宅らしめ、暘谷と曰う。」・「義叔に命じて、南交に宅らしめ」・「和仲に命じて、西に宅らしめ、昧谷と曰う。」・「和叔に命じて、朔方に宅らしめ、幽都と曰う。」とあり、『山海經』で四方風神が占めていた位置を、義和の四子が担う形になっている。しかし、「寅んで出ずる日を^{みちび}寅き」や「寅んで納る日を餞り」とあり太陽の出没に関わっているが、風のことは書かれておらず、義和の四子は風を司ってはいないと考えられる。のみならず義和の四子は、帝堯に「命じ」られていることから、帝堯に仕えて東南西北のそれぞれを管理・監督する官吏であると考えられているようである。

前述のように『尚書』「堯典」は殷代卜辞の伝承を伝えるものであると考えられ、金谷氏は「堯典篇の全体の成立は恐らく『孟子』よりも後であろうと思うが、この部分は七月の詩と同様の古い伝承をふまえているとしてよいであろう」(22)とする。しかし『尚書』「堯典」のこの部分は、もともとの殷代卜辞に見られた伝承が大きく変化している。その上、その変化の度合は、先に挙げた『山海經』「大荒經」の四方風神の部分よりも大きい。

殷代卜辞を再度挙げると、

東方曰析、風曰魯。

南方曰夾、風曰完。

西方曰弔、風曰彝。

□□□（北方曰）□、風曰段。

とあり、「某方曰某、風曰某。」という書式で書かれている。『山海經』はこの書式をほぼ踏襲しているが、各文の冒頭に神人について記述した一句が付加されている。

名曰折丹。東方曰折、來風曰俊。（「大荒東經」）

有人名曰鬲、北方曰鬲、來之風曰狻。（「大荒東經」）

有神名曰因因乎。南方曰因乎、夸風曰乎民。（「大荒南經」）

有人名曰石夷。來風曰韋。（「大荒西經」）

「大荒西經」には方位が欠落しているが、「大荒東經」と「大荒南經」は「有神（人）名曰某、

某方曰某、來（之）風曰某。」というほぼ共通する書式で書かれている。これらに対して、『尚書』「堯典」には、

分命羲仲、宅嵎夷、曰暘谷。寅賓出日、平秩東作。日中星鳥、以殷仲春。厥民析、鳥獸孳尾。

申命羲叔、宅南交、平秩南訛。敬致。日永星火、以正仲夏。厥民因、鳥獸希革。

分命和仲、宅西、曰昧谷。寅餞納日、平秩西成。宵中星虛、以殷仲秋。厥民夷、鳥獸毛毨。

申命和叔、宅朔方、曰幽都。平在朔易。日短星昴、以正仲冬。厥民隩、鳥獸氄毛。

とある。殷代卜辞と『山海經』に書かれていた「風」の項目は欠落しており、方位の項目は「厥民某」となっており、方位の名前としては書かれていない。さらに殷代卜辞の「某方曰某、風曰某。」や『山海經』の「有神（人）名曰某、某方曰某、來（之）風曰某。」という書式とは、大きく変化していることが分かる。この点から見て、『尚書』「堯典」のほうで記録された年代が下ると考えてよいのではないだろうか。つまり前掲『山海經』の四方風神に関する部分のほうが、より古い伝承を留めていると考えられるのである（23）。

『尚書』「堯典」では仲春・仲夏・仲秋・仲冬の各季節が、東南西北の方位に配置されている。例えば東については、「羲仲に命じて、嵎夷に宅らしめ、暘谷と曰う。…東作を平秩せしむ。日は中^{ひと}しく星は鳥、以て仲春を殷す。」とある。南・西・北についても同様である。さらに帝の言葉として「閏月を以て四時を定め歳を成す」とある。それ故『尚書』「堯典」からは、『山海經』と異なり、方位と季節との結びつきを読み取ることができる。

とはいうものの、『呂氏春秋』「十二紀」や『禮記』「月令」のような秩序立った五行説との間には、なお大きな隔りがある。隔りとは、中央の存在の有無及び完備した時令思想の有無である。時令とは金谷治氏によれば「自然界の季節の推移に応じて人として当然守るべき事業があると考え、それを政令として定めたもの」（24）とされる。その意味では『尚書』「堯典」にも「厥の民は析、鳥獸は孳尾す。」・「厥の民は因、鳥獸は希革す。」・「厥の民は夷、鳥獸は毛^{ととの}毨う。」・「厥の民は隩、鳥獸は氄毛す。」とあることから、時令思想の萌芽がないわけではない。しかし、『呂氏春秋』「十二紀」のような高度に儀礼化されたものではない。それ故、『尚書』「堯典」の上記の部分は、五行説に直接結びつくものではないと考えられる。

以上をまとめれば、『山海經』から『尚書』に至るまでの間に、四方と四季が結びつけられていったのであり、時令思想と結合したのはその後であろうと想像される。

上述の『尚書』「堯典」の記述で注目されるのは、四方風神の名が、農業を基盤とした人々の営為を表す語として読まれていることである。この農業にかかわる観念は何に由来するも

のなのか。小論はその由来が『毛詩』に見える「方社」の祭に求められるのではないかと思う。以下『毛詩』について検討する。

三 『毛詩』に見える「方社」

『毛詩』には「方」あるいは「方社」という語が見える。以下にその一つ「小雅・甫田」の二章を挙げる。なお引用文中の(*)は毛伝・鄭箋の付された位置を示す。

以我齊明	我が齊明と
與我犧羊	我が犧羊とを以て
以社以方(*)	以て社し以て方す
我田既臧	我が田 既に臧く ^よ
農夫之慶	農夫の慶なり
琴瑟擊鼓	琴瑟し鼓を撃ち
以御田祖	以て田祖を御え ^{むか}
以祈甘雨	以て甘雨を祈り
以介我稷黍	以て我が稷黍を介け
以穀我子女	以て我が子女を穀わん ^{やしな}

(毛伝) …社后土也。方迎四方氣於郊也。

…社は后土なり。方は四方の氣を郊に迎えるなり。

(鄭箋) 以絜齊豐盛與我純色之羊、秋祭社與四方、爲五穀成熟、報其功也。

絜齊豐盛と我が純色の羊とを以て、秋に社と四方とを祭り、五穀成熟する爲に、其の功に報いるなり。

この「甫田」について、毛伝は「甫田は幽王を刺るなり。君子 今を傷みて古を思う。」(25) とするが、『詩集傳』には「此の詩 公卿の田祿有る者、農事に力め、以て方社田祖の祭を奉ずるを述ぶ。」(26) と言う。家井眞氏は「この詩の詩意は、朱熹が略正しいが、「公卿有田祿者」と言うは餘計で、単に収穫を土地神・四方神・田の神等に感謝する詩と解すべきであろう。」(27) とする。『詩集傳』や家井氏の所説のように、鄭箋では「五穀成熟する爲に、其の功に報いるなり。」とあり、「方社」の祭の意味を収穫に対する感謝であるとしている。それでは、感謝する対象とは何か。「甫田」の本文「以て社し以て方す」について、毛伝では「社

は后土なり。方は四方の氣を郊に迎えるなり。」とし、鄭箋では「秋に社と四方とを祭り」と敷衍している。つまり、毛伝と鄭箋のいずれもが豊作に報いる対象として、「社」と「四方」とを想定するのである。

「方」の祭りとは、毛伝では「四方の氣を郊に迎える」こととされ、鄭箋では「秋に社と四方とを祭り」とあり、「方」とは四方を祭ることであるとする。それでは、毛伝の「四方の氣を郊に迎える」ことの意味とは何であったのだろうか。その手掛かりとなる記述が『呂氏春秋』にある。『呂氏春秋』では、以下のように、各々の季節の始めに天子が郊外でその季節を迎えている。引用文中の括弧は高誘注を示す。

立春之日天子親率三公・九卿・諸侯・大夫、以迎春於東郊。(…迎春木氣於東方八里之郊。)
(「孟春紀」)

立春の日には天子 親ら三公・九卿・諸侯・大夫を率いて、以て春を東郊に迎う。(…春の木氣を東方八里の郊に迎う。)

立夏之日天子親率三公・九卿・大夫、以迎夏於南郊。(「孟夏紀」)
立夏の日には天子 親ら三公・九卿・大夫を率いて、以て夏を南郊に迎う。

立秋之日天子親率三公・九卿・諸侯・大夫、以迎秋於西郊。(「孟秋紀」)
立秋の日には天子 親ら三公・九卿・諸侯・大夫を率いて、以て秋を西郊に迎う。

立冬之日天子親率三公・九卿・大夫、以迎冬於北郊。(「孟冬紀」)
立冬の日には天子 親ら三公・九卿・大夫を率いて、以て冬を北郊に迎う。

「春を東郊に迎う」・「夏を南郊に迎う」・「秋を西郊に迎う」・「冬を北郊に迎う」とあり、天子が郊外でその季節を迎えている。その際に迎えらるる氣は、高誘注に「春の木氣を東方八里の郊に迎う」とあるように、特定の季節の氣のみである。これに対し「小雅・甫田」においては毛伝に拠る限り、秋の「方」において、特定の季節の氣ではなく、「四方の氣」が迎えられているのである。

また、同じく『毛詩』「大雅・雲漢」にも「方社」の語が見える。引用文中の(*)は鄭箋の付された位置を示す。

早既太甚 早既に太甚し

黽勉畏去	黽勉して畏を去る
胡寧 ^{もつ} 瘼我以早	胡ぞ寧て我を瘼 ^や ましむるに早を以てす
僭不知其故	僭 ^か つて其の故を知らず
祈年孔夙	年を祈ること孔だ夙く
方社不莫	方社も莫 ^{おそ} からず
昊天上帝	昊天上帝
則不我虞	則ち我を虞 ^{はか} らず
敬恭明神	明神を敬恭す
宜無悔怒（*）宜しく悔怒無かるべし	

（鄭箋）…我祈豐年甚早、祭四方與社又不晚。…

…我れ豐年を祈ること甚だ早く、四方と社とを祭ることも又た晚からず。…

「雲漢」の本文「方社も莫からず」について、鄭箋は「四方と社とを祭ることも又た晚からず。」と記し、本文の「方社」が鄭箋では「四方と社」と敷衍されている。つまり、「甫田」でも「雲漢」でも「方」と「社」は、いずれも四つの方位と社を祭ることであるとされている。

「方社」の祭りの意味について、「甫田」の鄭箋では、「五穀成熟」したためにその功績に報いるのだとされ、収穫に対する感謝であると考えられた。「雲漢」の本文には「年を祈ること孔だ夙く 方社も莫^{おそ}からず」とあり、豊作を祈ることと「方社」の祭りは同様の意味を持つものとして考えられていたと読み取れる。つまり、「甫田」における「方社」は、前掲の家井眞氏の所説のように、農耕による収穫を感謝する収穫祭としての性格を持っており、一方「雲漢」における「方社」は、豊作を祈願する予祝儀礼としての性格を持っていたと考えられるのである。すなわち、「甫田」と「雲漢」の「方社」の例からは、四方位と農耕との密接な結びつきを読み取ることができる。

功に報いる祭りとしての「方」は、上に挙げた『毛詩』の二例のほかに、『周禮』『夏官・大司馬』や『呂氏春秋』『季秋紀』にも見える。以下に『周禮』『夏官・大司馬』を挙げる。引用文中の括弧は鄭注を示す。

中秋、教兵如振旅之陳。…遂以彌田如蒐田之灋、羅弊致禽、以祀祊。（…祊當爲方。聲之誤也。秋田主祭四方、報成萬物。）（『夏官・大司馬』）

中秋には、兵を教えること振旅の陳の如くす。…遂て以て彌田すること蒐田の灋の如くし、羅弊し禽を致し、以て祊を祀る。（…祊は當に方と爲すべし。聲の誤りなり。秋には田主

四方を祭り、萬物を成すに報う。)

鄭注に「祊は當に方と爲すべし。聲の誤りなり。秋には田主 四方を祭」とあり、この「祊」は「方」であり、四方が萬物を育成したことに対して報いる祭であると考えられるのである(28)。

さらに「甫田」に付された毛伝には「方は四方の氣を郊に迎えるなり。」とあった。ここより、各方位と農耕を仲立ちするものとして「四方の氣」が考えられていたのであろうことを読み取ることができる。前述したように『呂氏春秋』によれば、四方の氣は各々の季節の始めに郊外で迎えられる。また以下に述べる「讎」のように、季節の終わりにその季節の氣を送る儀礼も行われており、各々の季節の循環を「氣」という概念で表現していたと考えられる。

それでは「氣」の概念は具体的にどのような体験から生まれたものなのだろうか。「氣」について赤塚忠氏は『管子』四時篇(29)を挙げ、「風を標準にして季節の循環を考え、そこから氣という概念も生じて来たことを如実に示している。」(30)とする。

赤塚忠氏の指摘のように、氣の概念が風から発生してきたとすると、風に対してはどのような儀礼が行われていたのだろうか。

まず『爾雅』「釋天」では、風を祭ることを「磔」としている。

祭風曰磔。(『爾雅』「釋天」)

風を祭るを磔と曰う。

「磔」の習俗は、風の持つ負の側面を禦ぐ儀礼でもあると考えられる。この「磔」については『呂氏春秋』「季春紀」・「季冬紀」の条に次のようにある。

國人讎九門、磔攘以畢春氣。(「季春紀」)(31)

國人 九門に讎し、磔攘し以て春氣を^つ畢す。

命有司大讎、旁磔出土牛、以送寒氣。(「季冬紀」)(32)

有司に命じて大讎し、旁く磔し土牛を出し、以て寒氣を送る。

それぞれ季春・季冬に「讎」の儀礼を行い、その儀礼の中で「磔」して各々の季節の氣を「^つ畢す」あるいは「送る」とある。このことから、「磔」は「讎」の儀礼の一部として行われ

ていることが分かる。「儺」の儀礼についてはこの季春・季冬の二条の他に、『呂氏春秋』「仲秋紀」の条にも見える。

天子乃儺、禦佐疫、以通秋氣。（「仲秋紀」）（33）

天子乃ち儺し、佐疫を禦ぎ、以て秋氣を通ぜしむ。

仲秋に「儺」の儀礼を行い、疫病を防ぎ、秋氣を通じさせるとされる。以上より、「儺」（34）の儀礼は、夏以外の季節に行われ、「春氣を畢す」・「寒氣を送る」・「秋氣を通ぜしむ」などあるところから、その対象はそれぞれの季節の氣であると言える。「佐疫を禦」ぐとされる「儺」の儀礼からは、各々の季節の「氣」が持つ負の側面を排除し、その災厄から城市を守禦しようとしたことが読み取られる。

『爾雅』「釋天」によれば「磔」の対象は風であった。『呂氏春秋』「季春紀」・「季冬紀」によれば、「磔」は「儺」の儀礼の一部として行われ、その対象は各々の季節の氣である。また先に挙げた『毛詩』「甫田」の毛伝によれば、「方」は「四方の氣を郊に迎える」こととされており、氣は「方」の祭祀の対象あるいは各方位と農耕を仲立ちするものとなっていた。

以上のことから『毛詩』に見える「方」は、四方から到来する氣あるいは風を祭る祭祀ではなかったか。つまり、「方」の対象の「四方の氣」とは、各々の季節に吹く風ではないかと考えられるのである。

さて、先に挙げた『毛詩』「甫田」の鄭注に「秋に社と四方とを祭り、五穀成熟する爲に、其の功に報いるなり」とあったように、「方」の祭祀は、四方風が持つ正の側面に対して感謝する収穫祭のような意味合いを持っていた。しかし「儺」の儀礼においては、各々の季節の風が持つ負の側面を祓い排除しようとする意図を読み取ることができた。こうした風の持つ二面性について、金谷治氏は「殷代四方風をそのまま四季風と見なすことにも疑問がないわけではない。」（35）とし、「甲骨文にあらわれる風は、四方風が「年を求う」ために禱られる（小屯丙編挿圖七）ほか、「風を方に寧む、雨ありや」（京大人文 一九六七）のように確かに農耕と関係しているが、また「王其れ田せんに、大風に遘わざるか」（殷契佚存七三）のように狩猟の天候とかかわるものもあり、「丙午トして亘貞う、今日、風は禍せんか」（殷虛後編上三一・一四）あるいは「風は禍を爲さず」（鐵雲藏龜一八八、一）と、一般的な禍害を卜するものもある。この風の禍害は、『史記』「封禪書」に「狗を邑の四門に磔して、以て蠱菑を禦ぐ」（36）とあるのや『爾雅』「釋天」に「風を祭るを磔と曰う」とあるのと考えあわせることを許されるなら、風と共にやってくるとされた邪氣の害——『春秋左氏伝』（37）などに見られる疾病や災害をひき起こすような一般的な禍害——をも意味していたと見られ

る。四方風を農耕の面だけで考えるのにも、問題は残るであろう。」(38)とする。

しかし少なくとも『毛詩』の「方社」の例からは、方位と季節との密接な結びつきが確認できた。そこで前述のように「方社」に収穫祭としての側面があり、農耕を基盤とした村落共同体において行われる季節祭的な意味合いを帯びていたとするのならば、『呂氏春秋』「十二紀」や『禮記』「月令」のように高度に組織化・儀礼化されてはいないが、農耕を基盤とした比較的素朴な時令の萌芽を認めることはできるのではないだろうか。

ところで、胡厚宣氏は「武丁時の四方風が、必ず八風の起源であろうことは疑いない。(武丁時之四方風、必其(八風)濫觴無疑也)」(39)として、四方風から八風へ発展していったと考えている。四方風から八風に発展していったと仮定すると、八風の段階では方位と季節及び、時令思想との結びつきはどうであったのだろうか。

まず比較的整理されて八風が記されていると思われる『淮南子』「天文訓」を見てみることにしたい。引用文中の括弧内は高誘注を示す。

何謂八風。距日冬至四十五日、條風至。(艮卦之風、一名融。爲笙也)條風至四十五日、明庶風至。(震卦之風也。爲管也)明庶風至四十五日、清明風至。(巽卦之風也。爲柷也)清明風至四十五日、景風至。(離卦之風也。爲弦也)景風至四十五日、涼風至。(坤卦之風也。爲塤也)涼風至四十五日、閭闔風至。(兌卦之風也。爲鐘也)閭闔風至四十五日、不周風至。(乾卦之風也。爲磬也)不周風至四十五日、廣莫風至。(坎卦之風也。爲鼓也)條風至、則出輕繫、去稽留。(立春、故出輕繫)明庶風至、則正封疆、脩田疇。(春分播穀。故正疆界、治田疇也)清明風至、則出幣帛、使諸侯。(立夏長養、布恩惠。故幣帛聘問諸侯也)景風至、爵有位、賞有功。(夏至陰氣在下、陽盛於上、象陽布施。故嘗有功、封建侯也)涼風至、則報地德、祀四郊。(立秋節農、乃登穀嘗祭。故報地德、祀四方神也)閭闔風至、則收懸垂、琴瑟不張。(秋分殺氣、國君愴愴。故去鐘磬縣垂之樂也)不周風至、則脩宮室、繕邊城。(立冬節士、工其始。故治宮室、繕修邊城、備寇難也)廣莫風至、則閉關梁、決刑罰。(「天文訓」)

何をか八風と謂う。日の冬至を距てること四十五日して、條風至る。(艮卦の風、一に融と名づく。笙を爲すなり)條風至りて四十五日、明庶風至る。(震卦の風なり。管を爲すなり)明庶風至りて四十五日、清明風至る。(巽卦の風なり。柷を爲すなり)清明風至りて四十五日、景風至る。(離卦の風なり。弦を爲すなり)景風至りて四十五日、涼風至る。(坤卦の風なり。塤を爲すなり)涼風至りて四十五日、閭闔風至る。(兌卦の風なり。鐘を爲すなり)閭闔風至りて四十五日、不周風至る。(乾卦の風なり。磬を爲すなり)不周風至りて四十五日、廣莫風至る。(坎卦の風なり。鼓を爲すなり)條風至れば、則ち輕繫を出し、稽留を去

る。(立春、故に輕繫を出す) 明庶風至れば、則ち封疆を正し、田疇を修む。(春分には穀を播く。故に疆界を正し、田疇を治めるなり) 清明風至れば、則ち幣帛を出し、諸侯に使いす。(立夏には長養し、恩恵を布く。故に幣帛もて諸侯を聘問するなり) 景風至れば、則ち位有るを爵し、功有るを賞す。(夏至には陰氣は下に在り、陽は上に盛り、陽に象いて布施す。故に功有るを賞し、侯に封建するなり) 涼風至れば、則ち地徳に報い、四郊を祀る。

(立秋には農を節し、乃ち穀を登せて嘗祭す。故に地徳に報いて、四方神を祀るなり) 閭闔風至れば、則ち懸垂を収め、琴瑟張らず。(秋分は殺氣、國君 愴愴す。故に鐘磬縣垂の樂を去るなり) 不周風至れば、則ち宮室を脩め、邊城を繕う。(立冬には土を節し、工 其れ始む。故に宮室を治め、邊城を繕修し、寇難に備えるなり) 廣莫風至れば、則ち關梁を閉じ、刑罰を決す。

冬至を起点として四十五日ごとに吹いてくる風を、それぞれ條風・明庶風・清明風・景風・涼風・閭闔風・不周風・廣莫風と言ひ、八つの風で一巡するサイクルで一年を分割している。この八風は、各々の節氣を表示する基準であると考えられていたのである。また「條風至れば、則ち輕繫を出し、稽留を去る」や「明庶風至れば、則ち封疆を正し、田疇を修む」などとあるように、各々の八風で分割された節氣について行ふべき時令が設定されている。『淮南子』「天文訓」のこの八風に関する部分は、ほぼ同じ文が『太平御覽』卷九天部所引『易緯通卦驗』にも見えている(40)。

さらに『淮南子』「墜形訓」には、八風が吹いてくる八つの方向が記されている。引用文中の括弧内は高誘注を示す。

何謂八風。東北曰炎風。(艮氣所生、一曰融風也) 東方曰條風。(震氣所生也。一曰明庶風) 東南曰景風。(巽氣所生也。一曰清明風) 南方曰巨風。(離氣所生也。一曰愴風) 西南曰涼風。(坤氣所生也) 西方曰颺風。(兌氣所生也) 西北曰麗風。(乾氣所生也。一曰閭闔風) 北方曰寒風。(坎氣所生也。一曰廣莫風)(「墜形訓」)

何をか八風と謂う。東北は炎風と曰う。(艮氣の生ずる所、一に融風と曰うなり) 東方は條風と曰う。(震氣の生ずる所なり。一に明庶風と曰う) 東南は景風と曰う。(巽氣の生ずる所なり。一に清明風と曰う) 南方は巨風と曰う。(離氣の生ずる所なり。一に愴風と曰う) 西南は涼風と曰う。(坤氣の生ずる所なり) 西方は颺風と曰う。(兌氣の生ずる所なり) 西北は麗風と曰う。(乾氣の生ずる所なり。一に閭闔風と曰う) 北方は寒風と曰う。(坎氣の生ずる所なり。一に廣莫風と曰う)

ここでは八風の名前を、炎風・條風・景風・巨風・涼風・飈風・麗風・寒風とする。「天文訓」の八風とは、五ヶ所において名称を異にしている。以下に対照表を示す。括弧内は高誘注に見えるものである。

	東北（艮）	東（震）	東南（巽）	南（離）	西南（坤）	西（兌）	西北（乾）	北（坎）
墜形訓	炎風 (融風)	條風 (明庶風)	景風 (清明風)	巨風 (愷風)	涼風	飈風	麗風 (閭闔風)	寒風 (廣莫風)
天文訓	條風 (融風)	明庶風	清明風	景風	涼風	閭闔風	不周風	廣莫風

南風が「天文訓」では「景風」とされ、「墜形訓」では「巨風」とされている点、西風が「天文訓」では「閭闔風」とされるが、「墜形訓」の高誘注では「閭闔風」は西北とされる点、「墜形訓」の西風は「飈風」とされている点が異なる。しかし、「融風」・「明庶風」・「清明風」・「涼風」・「廣莫風」の六つの風については、高誘注を参照する限りでは一致している。

「天文訓」では各々の季節に行うべき時令が設定されており、一方、「墜形訓」では方位が特定されている。つまり『淮南子』の八風の段階では、方位と季節と時令とが結びつけられているのである。また『國語』『周語下』には政治と八風との関わりについて述べた記述が見られる。

（伶州鳩）對曰、…而行之以遂八風。於是乎氣無滯陰、亦無散陽。陰陽序次、風雨時至、嘉生繁祉、人民飭利、物備而樂成、上下不罷。…（「周語下」）

（伶州鳩）對えて曰く、「…而して之を行^{したが}い以て八風に遂う。是に於いて氣に滯陰する無く、亦た散陽する無し。陰陽 序次し、風雨 時に至り、嘉生 繁祉し、人民 飭利し、物 備わりて樂 成り、上下罷れず。…」

政治と八風との関わりを示す記載は『易緯通卦驗』にも「王 當に八風に順いて、八政を行い、八卦に當つべきなり。」とある。四方風から八風に発展していったと仮定した場合、八風の段階では既に方位と季節との配当関係は確定しており、時令思想までもが結合していたことが分かる。

さて「四方の氣」と関わる「方社」について、先に掲げた『毛詩』においては「方社」に季節祭的な意味合いが認められた。では『淮南子』ではどうか。『淮南子』『天文訓』に「涼風至れば、則ち地徳に報い、四郊を祀る。」とある。その高誘注に「立秋には農を節し、乃ち

穀を登せて嘗祭す。故に地徳に報いて、四方神を祀るなり。」という。すなわち高注は地徳に報いる祭祀として「嘗祭」を挙げている。これは『毛詩』の「方社」と同じ性格のものなのだろうか。

『毛詩』「魯頌・閟宮」・「小雅・楚茨」(41)・「小雅・天保」(42)等にはこの嘗祭に関わる記述が見える。ここでは、『毛詩』「魯頌・閟宮」の当該部分を挙げる。

周公皇祖 亦其福女 周公皇祖も 亦た其れ女に福す
秋而載嘗 夏而福衡 秋にして載ち嘗し 夏にして福衡す。

「秋にして載ち嘗し」とあり、秋に嘗祭を行うことが確認できる。また同じく『毛詩』の「周頌・豊年」の毛伝「豊年は秋冬の報なり。(豊年秋冬報也。)」に付された鄭箋に、

報者謂嘗也烝也。(「周頌・豊年」)
報は謂えらく嘗なり烝なり。

とあり、報いるための祭祀は嘗と烝との二祭であることが説かれている。これは四季折々の祭祀のうちの、秋と冬に行われる二種の祭祀である。『周禮』「春官・大宗伯」に以下のようにある。

以祠春享先王、以禴夏享先王、以嘗秋享先王、以烝冬享先王。(「春官・大宗伯」)
祠を以て春には先王に^{すす}享め、禴を以て夏には先王に享め、嘗を以て秋には先王に享め、烝を以て冬には先王に享む。

四季折々に祠・禴・嘗・烝の祭祀を行うとされている。四季折々の祭祀のことは、以下に挙げる『禮記』「祭統」にも記されている。引用文中の(*)は鄭玄注の付された位置を示す。

凡祭有四時。春祭曰禘、夏祭曰禘、秋祭曰嘗、冬祭曰烝(*)。(「祭統」)

凡そ祭には四時有り。春祭は禘と曰い、夏祭は禘と曰い、秋祭は嘗と曰い、冬祭は烝と曰う。

春祭と夏祭が、『周禮』では「祀」と「禴」、『禮記』では「禘」と「禘」で、変わっている。鄭玄は「夏殷の時の禮を謂うなり。(謂夏殷時禮也。)」と、「祭統」の記述は周代の儀礼であ

る『周禮』と異なり、夏殷のことをいうとしている。また、四季折々の祭祀は庶人も行ったことが『禮記』『王制』に見える。

庶人春薦韭、夏薦麥、秋薦黍、冬薦稻。（「王制」）

庶人は春には韭を薦め、夏には麥を薦め、秋には黍を薦め、冬には稻を薦む。

四季折々にその季節の収穫物を薦めていることが確認できる。天子が四季折々に行う祀・禴・嘗・烝の祭祀と同じの意味合いの祭りを、庶人も行っていたことが分かる。

秋祭の嘗は、天子のみではなく、庶人も関与して行われていたようである。『呂氏春秋』『孟秋紀』に以下のようにある。

是月也、農乃升穀、天子嘗新、先薦寢廟。（「孟秋紀」）

是月や、農は乃ち穀を升し、天子は新を嘗め、先に寢廟に薦む。

嘗祭の場に農民が参加したかどうかは分明ではないが、農民の献じた新穀を天子が「寢廟に薦」めていることから、一連の嘗祭の儀礼に農民が関与していると考えられる。

以上のことから嘗とは、農耕による収穫に対して四方や地や祖先に報いるため、収穫物を捧げて祭ることであると考えられる。それは天子のみが行う宮廷の儀礼としてだけではなく、農耕を主とする村落共同体においても行われる収穫後の秋祭としての側面を持っているのである。

そこで『毛詩』に戻り、先に挙げた「小雅・甫田」の二章に続く三章を見てみる。引用文中の（*）は鄭箋の付された位置を示す。

曾孫來止	曾孫 来る
以其婦子	其の婦子と以 ^{とも} にす
饁彼南畝	彼の南畝に饁す
田峻至喜	田峻 至れば喜 ^{しよく} し
攘其左右	其の左右を攘し
嘗其旨否（*）	其の旨否を嘗む
禾易長畝	禾 ^{おさ} 易まり畝を ^お 長う
終善且有	終に善く且つ有 ^{おお} し
曾孫不怒	曾孫 怒らず

農夫克敏 農夫 克^よく敏なり

(鄭箋) …成王親爲嘗其饋之美否。

…成王 親ら爲に其の饋の美否を嘗む。

先に挙げた「甫田」の二章とこの三章からは、農耕を主とする村落共同体において、秋の季節祭として収穫祭を催し、収穫した穀物を四方と地と祖先とに捧げて感謝する祭祀の場が読み取れるのではないかと思う。「其の旨否を嘗む」についてははっきりと嘗祭であるかどうかは分からないが、鄭箋に「成王 親ら爲に其の饋の美否を嘗む」とあることから、関連はあると考えられる。

以上のことから、先に挙げた『毛詩』の「方社」の祭祀には四方風と農耕との結びつきを見て取ることができ、さらに嘗祭との関連から周期的に行われる農耕儀礼としての収穫祭の性格もより明確に読み取ることができる。

四 祭祀を受ける対象

『毛詩』に見える「方社」の祭は、四方と社とに感謝を捧げる収穫祭としての側面をもっており、それ故に四方風は農耕と密接に関わっていたとすることができる。

「方社」の語について、「甫田」と「雲漢」のいずれもが、「方」と「社」を併せて祭ることに注目したい。「方」の祭祀対象とは前節で検討したように、四方の気あるいは四方風である。この四方風が殷代卜辞の四方風神と同一のものかどうかは断言できないが、『尚書』「堯典」や『山海經』に殷代卜辞の伝承が残されていることから考えると、殷代卜辞の四方風神かそれに近いものである可能性もあるのではないだろうか。

一方「社」とは、「小雅・甫田」の毛伝によれば「后土」とであるとされていた。「后土」とは五官神の一柱とされる。このことは『春秋左氏傳』「昭公二十九年」の条に見え、魏獻子の問いに対する蔡墨の答えの中で言及される。

(蔡墨) 曰、…故有五行之官、是謂五官。實列受氏姓、封爲上公。祀爲貴神、社稷五祀是尊是奉。木正曰句芒、火正曰祝融、金正曰蓐收、水正曰玄冥、土正曰后土。…

(魏) 獻子曰、社稷五祀、誰氏之五官也。

(蔡墨) 對曰、少皞氏有四叔、曰重、曰該、曰脩、曰熙。實能金・木及水。使重爲句芒木正、該爲蓐收金正、脩及熙爲玄冥。世不失職、遂濟窮桑。此其三祀也。顓頊氏有子曰犁、

爲祝融。共工氏有子曰句龍、爲后土。此其二祀也。后土爲社、稷田正也。有烈山氏之子曰柱、爲稷。自夏以上祀之、周棄亦爲稷、自商以來祀之。（「昭公二十九年」）

（蔡墨）曰く、「…故^{むかし} 五行の官有り、是れを五官と謂う。實に氏姓を列受し、封じて上公と爲す。祀りて貴神と爲し、社稷の五祀 是れ尊び是れ奉ず。木正を句芒と曰い、火正を祝融と曰い、金正を蓐收と曰い、水正を玄冥と曰い、土正を后土と曰う。…」と。

（魏）獻子曰く、「社稷の五祀は、誰氏の五官なるや」と。

（蔡墨）對えて曰く、「少皞氏に四叔有りて、重と曰い、該と曰い、脩と曰い、熙と曰う。實に金・木及び水を能くす。重をして句芒木正爲らしめ、該をして蓐收金正爲らしめ、脩及び熙をして玄冥爲らしむ。世職を失わず、遂に窮桑に濟る。此れ其の三祀なり。顓頊氏に子有りて犁と曰い、祝融と爲る。共工氏に子有りて句龍と曰い、后土と爲る。此れ其の二祀なり。后土は社と爲る。稷とは田の^{ちよう}正なり。烈山氏の子有りて柱と曰い、稷と爲る。夏自り以上之を祀る。周棄も亦た稷と爲り、商自り以來之を祀る」と。

「共工氏に子有り句龍と曰い、后土と爲る」とあり、「后土」は共工の子の句龍であるとされる。「夏自り以上之を祀る」とあるように、この伝承が夏以来の伝承をそのまま伝えているとは考えがたい。しかし、この蔡墨の語る伝承と、同じ伝承に根ざしていると考えられる記述が『國語』『魯語上』に見える。

（展禽曰）…昔烈山氏之有天下也、其子曰柱、能殖百穀・百蔬。夏之興也、周棄繼之、故祀以爲稷。共工氏之伯九有也、其子曰后土、能平九土。故祀以爲社。…凡禘・郊・祖・宗・報、此五者、國之典祀也。加之以社稷山川之神。…（「魯語上」）

（展禽曰く）「…昔 烈山氏の天下を有つや、其の子は柱と曰い、能く百穀・百蔬を殖う。夏の興るや、周棄 之を繼ぐ、故に祀りて以て稷と爲す。共工氏の九有に伯たるや、其の子は后土と曰い、能く九土を平らぐ。故に祀りて以て社と爲す。…凡そ禘・郊・祖・宗・報、此の五者は、國の典祀なり。之に加うるに社稷山川の神を以てす。…」

「共工氏の九有に伯たるや、其の子は后土と曰い、能く九土を平らぐ。故に祀りて以て社と爲す」とあり、共工の子が「后土」であり「社」神となったとある。こちらの『國語』の記述には「句龍」という名は出てこないが、共工の子が「后土」であるという点は、『春秋左氏傳』と一致している。

さらに、『春秋左氏傳』では「后土は社と爲る。」とし、『國語』でも「其の子は后土と曰い、能く九土を平らぐ。故に祀りて以て社と爲す」として、「后土」を「社」としている。加えて

『春秋左氏傳』と『國語』のいずれもが、この「社」の神に「稷」の神を連ねて記述している。つまり「后土」と「稷」とは、密接な関係をもっていたことが窺われるのである。また、「稷」は『國語』に「能く百穀・百蔬を殖う」とあるように、農耕の始祖とも思われる。この稷と一組にされていることは、「社」と農耕との関係を示唆するものと言えるのではないだろうか。

「社」の起源について、池田末利氏は「土地神（earth God）がその実体であるが、更に遡源的に考えると、この土地神は祖神崇拜に始源する」（43）とし、「思うに、句龍伝説の生ずる所以は、その原始的形態において祖神的性格を有する社が具象化されて、治水に功ある句龍が部族神として、これに充当されるに到ったのではないか。」とする（44）。

「社」が「后土」・「句龍」であるかどうかは措くとしても、『毛詩』「甫田」の鄭箋に「秋に社と四方とを祭り、五穀成熟する爲に、其の功に報いるなり。」とあること、『淮南子』「天文訓」に「涼風至れば、則ち地徳に報い、四郊を祀る。」と言ひ高誘注に「立秋には農を節し、乃ち穀を登せて嘗祭す。故に地徳に報いて、四方神を祀るなり。」とあることから考えると、「社」祭の対象となる社神は、農耕による収穫をもたらす土地神であると言えることができる。

まとめ

従来殷代四方風に起源を持つとされた五行説が、方位と季節の結びつきを基礎としてどのように形成されてきたのかを考察してきた。殷代四方風の伝承を残していると考えられている『尚書』「堯典」と『山海經』について、『尚書』「堯典」には時令思想の萌芽は認められるが、五行説への直接的な継承関係は認められなかった。一方『山海經』には殷代四方風神が記されていたが、四方と季節との結びつきは確認できず、時令思想との関係も認められなかった。（45）

こうした中で『毛詩』に見える「方社」の祭の分析から、これが周期的に行われる農耕儀礼としての側面を持つこと、その祭祀を受ける対象として、四方風あるいはその神格化された風神と、農耕による収穫をもたらす土地神とが考えられていたことを明らかにした。

「方社」の祭では、四方と季節とは風を仲立ちとして結びつけられていた。また、『呂氏春秋』ほど完備していなかったのものであろうが、「方社」の祭が周期的に行われる農耕儀礼としての側面を持つことから、素朴な時令思想の萌芽も認められる。さらに、四方位と土地神が祭祀を受ける対象となっており、未だ木火土金水の要素は見られないにしても、五行説の基本的な枠組みは認められるのではないだろうか。そしてこの枠組みが、四方から五行説へと発展し

ていく際の、一つの契機になったと考えられるのである。

注

- (1) 赤塚忠「中国古代における風の信仰と五行説」(『赤塚忠著作集第一巻中国古代文化史』所収、研文社、一九八八年)三九〇頁参照。初出は、「中国古代における風の信仰と五行説」(創立百周年記念『二松学舎大学』(中国文学編)一九七七年)。
- (2) 金谷治氏は「時令は四季の気の推移に対応して作られ、四季を四方に配する形で構成されると、そこに中央ができて五行説と結びつきやすい形になる。」(「陰陽五行説の成立について」『東方学会創立四十周年記念東方學論集』一九八七年、一二頁参照)とする。
- (3) 胡厚宣「甲骨文四方風名考證」(『甲骨學商史論叢』初集上、文友堂書店出版、一九四四年)。
- (4) 胡厚宣「論五方觀念及中國稱謂之起源」(注3掲書)。
- (5) 胡厚宣編『戦後京津新獲甲骨集』、五二〇号、二六頁参照。
- (6) 胡厚宣氏(注3掲書、四葉参照)は「在甲骨文僅為四方名某風名某、山海經文畧同。惟已將四方之名神人化、至堯典則演爲堯命羲和四子掌四時星曆教民耕作之事、開夏小正與月令之先聲矣。」とする。
- (7) 赤塚氏、注1掲書、四〇八頁参照。
- (8) 金谷治『管子の研究』(岩波書店、一九八七年)二二五頁参照。初出は、『管子』中の時令思想」(『集刊東洋学』第五十号、一九八三年)。
- (9) 金谷治「五行説の起源」(『東方学報』七八、一九八九年)三頁参照。
- (10) 楊樹達「甲骨文中之四方風名與神名」(『積微居甲骨文説』上海古籍出版社、一九八六年)七八頁参照。初版は、中國科學院出版、一九五四年。
- (11) 陳夢家『殷墟卜辭綜述』「第十七章宗教 第五節土地諸祇」(科学出版社、一九五六年)五八九頁参照。
- (12) 池田末利「四方百物考」(『中國古代宗教史研究—制度と思想—』東海大学出版会、一九八一年)一二八頁参照。初出は、「四方百物考」(『大東文化大學漢學會誌』三號、一九六〇年)。
- (13) 楊樹達氏、注10掲書、八一頁参照。
- (14) 池田末利氏、注12掲書、一三二頁参照。
- (15) 金谷氏、注9掲論文、三頁参照。

- (16) 金谷氏、注9掲論文、四頁参照。
- (17) 袁珂氏(『山海經校注』巴蜀書社、一九九三年、四一三頁参照)、松田稔氏(『『山海經』の基礎的研究』笠間書院、一九九五年、三〇七頁参照)ともに「處東北隅」に作るべきであるとする。
- (18) 袁珂氏(『山海經校注』、四二六頁参照)は、「夸風則來風之譌也」とする。
- (19) 偽孔伝については、吉川幸次郎「尚書孔氏伝解題」(『吉川幸次郎全集』7、筑摩書房、一九六八年。初出は、『東方學報京都』第十一冊第一分、一九四〇年。)・池田末利『全釈漢文大系 尚書』「解説」(集英社、一九七六年。)参照。
- (20) 胡厚宣氏は「説文「析、破木也。一曰折也。」廣雅「析・折、分也」。蓋析折義同、且形亦近也。」(胡厚宣氏、注3掲書、二葉参照)とする。
- (21) 胡厚宣氏は「𡩺」を宛と読み、「説文「奥、宛也」。宛奥双聲。朱駿聲曰、「奥古音讀如隩、亦讀如宛。…」是甲骨文之「北方曰宛」、即大荒東經之「北方曰𡩺」、亦即堯典「宅朔方」之「厥民隩」也。」(胡厚宣氏、注2掲書、四葉参照)とする。
- (22) 金谷氏、注8掲書、二二八頁参照。
- (23) 陳夢家氏も「堯典雖然保存了卜辭四方名之名,而因爲它已雜入了四星之說,是較晚的;反之,山海經還保存了卜辭四方神名的最樸實的遺傳。」(注11掲書、五九四頁参照)とする。
- (24) 金谷氏、注2掲書、三頁参照。
- (25) 「甫田刺幽王也。君子傷今而思古焉。」(『毛詩』「小雅・甫田」)
- (26) 「此詩述公卿有田祿者、力於農事、以奉方社田祖之祭。」(『詩集傳』卷十三)
- (27) 家井眞『『詩經』の原義的研究』(研文出版、二〇〇四年)一四五頁参照。初出は、『詩經』甫田之什の構成に就いて(『二松學舎大學論集』第四五集、二〇〇二年)。
- (28) 『呂氏春秋』「季秋紀」には「命主祠祭禽於四方。(高誘注:…祭始設禽獸者於四方報其功也。)」とある。
- (29) 『管子』「四時篇」に以下のようにある。なお引用は四部叢刊本によったが、一部『諸子集成 管子校正』(戴望著、中華書局)に従って改めた。

東方曰星。其時曰春、其氣曰風。風生木與骨。其德喜羸而發出節時。…此謂星德。星者掌發爲風。…

…南方曰日。其時曰夏、其氣曰陽。陽生火(四部叢刊本は「人」に作る)與氣。其德施舍修樂。…此謂日德。…

…中央曰土。土德實輔四時入出。以風雨節土益力。土生皮肌膚。其德和平用均、中正無私…此謂歲德。…

…西方曰辰。其時曰秋、其氣曰陰。陰生金與甲。其德憂哀、靜正嚴順。…此謂辰德。…

…北方曰月。其時曰冬、其氣曰寒。寒生水與血。其德淳越、溫恕（四部叢刊本は「怒」に作る）周密。…此謂月德。

(30) 赤塚氏、注1掲書、四二三頁参照。

(31) 『禮記』『月令』は「命國難九門、磔攘以畢春氣。」に作る。

(32) 『禮記』『月令』は「命有司大難、旁磔出土牛、以送寒氣。」に作る。

(33) 『禮記』『月令』は「天子乃難、以達秋氣。」に作る。

(34) 難について坂出祥伸氏は、『禮記』『月令』の「命國難九門、磔攘以畢春氣。」の經文に付せられた鄭玄注に「又磔牲以攘於四方之神、所以畢止。」とあることを挙げ、「これを風神の意と解すれば、殷代の風祭の名残りをとどめているものとして注意をひく。」（坂出祥伸「中国古代における風の觀念とその展開」『関西大学中国文学紀要』第九号、一九八五年、三三頁注1参照）とする。

(35) 金谷氏、注9掲論文、三頁参照。

(36) 『史記』『封禪書』に「磔狗邑四門、以禦蠱菑。」とある。

(37) 金谷治氏は『春秋左氏傳』の以下の二例を挙げる。

（醫和）對曰、…天有六氣。…六氣曰陰陽風雨晦明也。分爲四時、序爲五節。過則爲菑。陰淫寒疾、陽淫熱疾、晦淫惑疾、明淫心疾。女陽物而晦時淫、則生內熱惑蠱之疾。（「昭公元年」）

夏五月火始昏見。丙子風梓慎曰、是謂融風火之始也。七日其火作乎。戊寅風甚。

壬午大甚。宋・衛・陳・鄭皆火。（「昭公十八年」）

(38) 金谷氏、注9掲論文、三～四頁参照。

(39) 胡厚宣氏、注3掲書、五葉参照。

(40) 『太平御覽』卷九天部所引『易緯通卦驗』

易緯通卦驗曰、冬至廣莫風至、誅有罪、斷大刑。立春條風至、赦小罪、出稽留。春分明庶風、正封疆、修田疇。立夏清明風至、出幣帛、禮諸侯。夏至景風至、辯大將、封有功。立秋涼風至、報土功、祀四鄉。秋分閭闔風至、解懸垂、琴瑟不張。立冬不周風至、修宮室、完邊城。八風以時、則陰陽變化、道成萬物、得以育生。王當順八風、行八政、當八卦也。

(41) 『毛詩』『小雅・楚茨』

濟濟跄跄 絜爾牛羊 以往烝嘗 或剝或亨 或肆或將 祝祭于祊 祀事孔明
先祖是皇 神保是饗 孝孫有慶 報以介福 萬壽無疆

(42) 『毛詩』「小雅・天保」

吉蠲爲饗 是用孝享 禴祠烝嘗 于公先王 君曰卜爾 萬壽無疆

(43) 池田末利「社の起源とその変遷一句龍伝説批判」(注 12 掲書)一〇八頁参照。初出は、
「社の起源とその変遷一句龍伝説批判」(『哲学』一三輯、一九六一年)。

(44) 池田氏、注 12 掲書、一一三頁参照。

(45) 但し四方神について、『山海經』には「折丹」・「鼯」・「因因乎」・「石夷」のように殷代ト辞の伝承を伝える四方風神の他に、二種類の四方神が記されている。それは「海外經」に見える「禺彊」・「祝融」・「蓐收」・「句芒」の四方神と、「大荒經」に見える「禺𪔐」・「不廷胡余」・「弇茲」・「禺彊」の四方神である。これら三種の四方神に関する記述について、殷代の四方風神から、五行説によって各々の方位を主宰する神が固定されるまでの間の過渡的なものと考えるが、詳細は別稿に譲りたい。